

2023年度  
香川大学教育学部 学校推薦型選抜Ⅰ

問題冊子 小論文 4ページ

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

**解答の書き方**

1. 解答は、問題冊子の指示に従って、別紙の解答用紙の所定の欄に横書きすること。
2. 解答用紙のます目に一文字ずつはっきりと解答を書くこと。
3. 行末以外は句読点に一文字分をあてること。
4. 解答用紙の所定の欄に、受験番号を記入すること。
5. 解答用紙には、指示された事項以外はいっさい記入しないこと。

**注意事項**

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に受験番号を必ず記入すること。
2. 下書き用紙は、片面だけ使用すること。
3. 用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
4. 監督者の「やめ」の指示で、ただちに筆記用具を置き、解答を終了すること。  
解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

**問題** 次の文章を読んで、後の設問1, 2に答えなさい。

私が、福祉や介助・介護の世界を考えると、その考え方の根幹となっているのは、「進行性筋ジストロフィー」という難病を抱えた、重度身体障害者の鹿野靖明さんと、彼を取り巻くボランティアたちとの関係性です。

筋ジストロフィーという病気は、全身の筋力が徐々に衰えていく難病で、根本的な治療法(根治療法)はいまだに確立されていません。

病気の進行は人によって違いますが、年齢とともに手や足などの筋力が徐々に低下し、鹿野さんの場合は、18歳のときに歩行障害から車いす生活になりました。

また、この病気が恐ろしいのは、手や足の筋力だけでなく、徐々に内臓の筋力も低下してしまうことです。たとえば、健康な人は、普段、無意識に呼吸していますが、それは呼吸筋が胸郭をふくらませたり、しぼませたりすることによって息を吸ったり吐いたりできるからで、筋ジスの場合、この作用も弱まってしまいます。

そんなわけで、一般に筋ジス患者は、専門の医療施設などで一生を終えるケースが少なくないのですが、そんな中、鹿野さんは、「どんなに障害が重くても、地域で普通に生活したい」という考え方を貫いた人でした。

とはいえ、手が動かない、足も動かないわけですから、介助者がいなくては生きていけません。おまけに鹿野さんは、35歳のとき、先ほどいった呼吸筋の低下によって、のどに穴を開ける「気管切開」の手術をして、人工呼吸器を装着しました。

人工呼吸器を装着すると、気管内に不定期に痰<sup>たん</sup>がたまるため、その都度、たまった痰を、そばにいる介助者が「吸引器」という機械で吸引してあげないと窒息してしまうという困難も背負ってしまいます。

とにかく1日24時間、つねに他人がそばにいないと生きていけないという境遇を鹿野さんは生きていました。

私が取材に訪れた当時、鹿野さんは人工呼吸器をつけているにもかかわらず、タバコを吸っていました。

当時は、今ほど「嫌煙権」や、受動喫煙の害がクローズアップされる時代ではありませんでしたが、それでも「障害者がタバコを吸うなんて」と、口には出さないまでも、そうした思いを抱く人は少なからずいたでしょうし、「わざわざ健康を害することをやるなんて、いかがなものか」という考えも思い浮かぶかもしれません。

鹿野さんが最初にタバコを覚えたのは、1983年(昭和58年)、23歳のときに、それまでいた障害者施設を飛び出して、札幌市内のアパートで自立生活を始めた頃でした。その後、呼吸筋が低下して入退院を繰り返すようになった30代の頃は、一時タバコをやめていたそうですが、私が取材に訪れた頃には、再び喫煙が日常化していました。

もちろん、鹿野さんは、自分でタバコを手にとって持ち上げることはできませんから、鹿野さんが「タ

「タバコ吸う！」というたびに、介助者がタバコに火をつけ、鹿野さんの口元まで持っていく「タバコ介助」を行っていました。

もしあなたが介助者だったとしたら、障害者から「タバコを吸いたい」といわれたとき、どう対応するでしょうか。

本人が「吸いたい」というなら吸わせてあげる、と深く考えずに介助する人もいるでしょうし、「いや、タバコは体に悪いから吸うべきではない」と考える人もいます。

あるいは、「受動喫煙で、私の体に悪いから困る」という人もいるかもしれませんし、そもそも生活保護や障害年金、公的介護料など、社会の“保護”のもとで生きている（「生かされている」）障害者がタバコを吸うなんて、しかも他人を受動喫煙の害にさらすなんて、もってのほかだろうと、たとえば、生活保護費でパチンコをする人がよく批判のやり玉に挙げられるように、ほとんど激高に近い怒りを抱く人も近頃では多いのかもしれない。

いずれにせよ、「障害者の自立を支える介助とはどうあるべきなのか」をめぐって、さまざまに意見が分かれるところだと思います。

では実際、鹿野さんを介助していたボランティアたちはどうだったのでしょうか。

山内太郎くんという学生ボランティアがいました。山内くんは当時、北海道大学の教育学部に通う学生でしたが、初めて鹿野さんから「タバコ吸う！」といわれたときは、思わず「え？」と思ったそうです。

「人工呼吸器をつけている人がタバコを吸うなんて、明らかに“害”がありそうだし、いってみれば、自殺行為に近い。自分はボランティアをするために来ているのであって、自殺行為に手を貸すためにここに来ているのではない」

そう思った山内くんは、「やめたほうがいいんじゃないですか？」といます。

しかし、鹿野さんは、簡単に引き下がるような人ではありませんから、

「いや、太郎。オレはね、ただでさえストレスが多いんだから吸わせろよ」

「でも、なんかそういうのはイヤなんですよね」

山内くんは、内心、「いっちゃっていいのかな」とドギマギしながらも、鹿野さんに対して、はっきり「イヤだ」と拒絶しました。

「てめえ、コノヤロー、吸わせろ！」

鹿野さんは、何だかんだカンシャクを起こしたものの、それでも「やだ！」と食い下がる山内くんに対し、「もうわかった。太郎には負けたよー」といます。

さて、ここには「介助」というものの難しさが、ある意味、凝縮していると思います。

たとえば、介助者が障害者の体のことを心配して、

「タバコは体に悪いから、やめたほうがいいですよ」

とってあげるのは、一見「やさしさ」や「思いやり」のようにも思えますが、果たしてそうなのでしょうか。

こうした考え方は、少し難しい言葉でいかえると、「パターンリズム（家父長主義、父権主義）」と

呼ばれる考え方の典型で、つまり、強い立場にある人が、弱い立場にある人に対し、「よかれ」と思って、本人に代わって意思決定を行う支配パターンの一つといえます。まさに鹿野さんが20代の頃、飛び出した障害者施設がそうであったように、保護者的で管理的な介護観に基づいた考え方です。

しかし、自立生活をする障害者にとっては、そもそも施設を出て、地域で暮らすという選択をしたこと自体が、喫煙のリスクどころではない、命がけの挑戦です。そのため、いかにも「あなたのことを思って」という、障害者への「やさしさ」や「思いやり」を装った主体性への侵犯にこそ、最も抵抗しなくてはならないと思うでしょう。

また、「障害者がタバコを吸うなんて」とか、「人のお世話になっておきながら生意気だ」「自分で働いて得たお金で吸うならまだしも」と思う人もいるかもしれませんが、そうした考え方には、「人としての義務を果たせない障害者は、分相応におとなしくふるまっていなければ、福祉という温情をかけてもらえない」という旧態依然とした福祉観が根づいています。

こうした考え方を「あわれみの福祉観」と呼んだりしますが、これは果たして正しいのでしょうか。

もともと障害者に生まれついたのは、なにもその人の責任というわけではありません。にもかかわらず、障害があるというだけで、「普通の生活」をおくる機会を奪われたり、周囲に頭を下げ続けて生きていかななくてはならないのでしょうか。また、誰しも人のお世話にはなりたくないし、自分の稼いだお金で、自分の好きなように生きたいという思いがあるものですが、障害者の場合、そうしたくても、そうするための雇用の場や働く機会そのものを奪われている、という面が多分にあります。

とはいえ、言い訳できない側面もあるでしょう。たとえば、受動喫煙の害を他人におよぼすことに対しては、障害者だろうが健常者だろうが、反論の余地などないかもしれません。しかし、ときに人間がそれとわかっていながら求める有害なもの、危険なもの、あるいは、障害者にも悪徳を犯す自由や権利が、もしあると考えるのなら、「自立を支える介助とは何なのか？」という問題はますます複雑になってしまいます。

では、介助者は、黙って何でも障害者のいうとおりに従うのが正しいのでしょうか。

もちろん、そんなことはないはずです。介助者は「召使い」ではありませんし、障害者の主張は何でも正しくて、何でも無条件に認められていいはずはありません。

結局、どうすればいいのかというと、そもそも「正解」や「教科書」などないことを前提に、お互いの立場や考え方を率直に話し合うのが一番です。それが最も妥当な解決法であり、そもそもコミュニケーションというのは、そのためにこそあるはずです。

ちなみに、山内太郎くんはというと、最初こそタバコ介助に抵抗を示したものの、こうした衝突や対話を積み重ねるうちに、鹿野さんの自立生活への思いを理解するようになり、

「まあ、結局、鹿野さんの人生なんだから、タバコを吸おうが吸うまいが、それを介助者がサポートするのは当然だ」

という思いに変化したといえます。

また、その一方で、鹿野さんの側はどうだったのかというと、タバコを吸わせてくれなかった山内く

んを“ダメな介助者”と判断したのではなく、むしろ、「太郎はなかなか骨のあるボランティアだ」と感じたというのですから、人間関係というのは不思議です。

結局、山内くんは、大学院に進んだのちも、週1回のボランティアを続け、鹿野さんが亡くなるまで、計6年間にわたって最も信頼の厚いボランティアの一人であり続けました。

現在、山内くんは、札幌市内の私立大学で、社会福祉論や障害福祉学を専攻する大学教員として活躍しています。

山内くん自身、あとで振り返ったとき、タバコをきっかけに鹿野さんと衝突した体験というのが、とても重要だったと述べています。もし、何でも鹿野さんのいうことに従う“イエスマン”だったとしたら、ボランティアは長続きせず、したがって、障害とか福祉について深く考えることにもつながらなかったのではないかと。

当時は、今ほどタバコの害がクローズアップされる時代ではなかったと述べていますが、それでも、マスクをしてタバコ介助をする女性ボランティアは何人かいましたし、あるいは、不満を口にすることもなく、やめてしまったボランティアもいたことでしょう。

タバコ介助をどう考えるかは、人それぞれですが、しかし、心に思ったことを相手に伝えるか伝えないかは重要な違いだと私は考えています。

出典：渡辺一史『なぜ人と人は支え合うのか 「障害」から考える』（ちくまプリマー新書、2018年12月、85～134頁）ただし、一部省略・変更した箇所がある。

設問1 本文中の下線部「主体性の侵犯」について筆者はどのように考えていますか。筆者の考えを、100字から150字以内で述べなさい。

設問2 多様な生き方への理解が求められる現代の社会で「相手と支え合う」ことについて、本文の内容と自身の経験をふまえ、600字から700字以内であなたの考えを述べなさい。